

---

# 仮面の策士 徳川秀忠

槇原勇一郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面の策士 徳川秀忠

### 【Nコード】

N7833L

### 【作者名】

槇原勇一郎

### 【あらすじ】

徳川秀忠。凡庸と言われる二代將軍だが、江戸幕府の礎を気づいた人物である。本当に彼は徳川家康の子でありながら、無能な人物であったのだろうか？

数々の失態は実は彼独自の目的があつての演技であつたのかもしれない。そんな想像から始まったお話です。複雑で割り切れない心情とやや不安定な精神面を持つ、後世の歴史家すら騙し続ける稀代の策士としての徳川秀忠を描き出す。

### 三人

秀忠は父を憎んではいなかった。兄の秀康に比べればのことである。

その父が、自分を世子に選んだことには驚き、迷惑に思った。何も兄弟で一番凡庸と言われる自分を跡取りにする必要はないではないか。兄秀康や弟の忠吉は武勇の誉れも高い。青瓢箪と陰口を叩かれる自分をなぜ選ぶのか。

だが、本当は秀忠も自分でわかっていた。父は秀忠が仮面を被っている事を知っていた。仮面の奥にある、稀代の策士としての本性まで見抜いているのだ。秀忠は目立つことが嫌いだった。そして戦などもっと嫌いだった。政にもそれほど強い関心があるわけではない。父が大阪にいる間、仕方なく江戸の留守を任されて覚えたに過ぎない。

関ヶ原前夜、中山道を進む別働隊を率いるという大役を任され、秀忠は憂鬱の極致であった。実は秀忠は石田三成が好きだった。不器用なほどに生真面目で、周囲から嫌われるとわかっていても、自分の信念を貫き通す。私心の無さは誰もが認めるところなのだが、その現われ方が周囲の反感を誘った。そんなうまくないところも含めて、三成と言う男に面白みを感じていたのだ。

小山評定の翌日、秀忠は兄秀康、弟忠吉の三人だけで酒を酌み交わした。

「秀忠よ、活躍を期待している。俺にはそのような機会は与えられなかったがな」

弟を激励しつつ、苦虫を噛み潰したように話すのは兄秀康である。秀康は不満なのだ。武勇の誉れ高い自分が、上杉の抑えとしてこの地に残されたことがである。武勇を信頼しているから、最強といわれる上杉の抑えを任せられるなどと、おためごかしを言われても納得できようはずもない。豊臣家、次いで結城家と養子にでた秀康は家康の後継者となることは諦めているものの、華々しく戦場で戦うことを夢見て生きてきた。今回はその最後の機会かも知れないのだ。

「兄上・・・ご存知のとおり私は戦いたくないのです・・・父上の跡取りなども嫌です。本当は兄上に代わってほしい・・・」  
「でも、そうはいきませんよ。父上のお決めになったことです」

そう言ったのは秀忠の同母弟である忠吉である。

「それに・・・私は三成殿を討ちたくなどないのです。あの御仁、不器用ではあるが正論しか口にしてないではないですか。彼に反感を持つ武將たちの気持ちもわからなくはないですが、本来はそれほどたいした問題ではないはず。それを父上がひそかに焚き付けて・・・」

「だが、もうそれを留められるような状況ではあるまい？」

秀康が見かねて言う。弟のことはよくわかっていた。だから激発もせずに自分の境遇を受け入れられる。自分も納得しなける状況にはあるが、秀忠もそうなのだ。二人の不幸はお互いが相手の求めるものを手にしており、しかもそれを取り替える権利は自分たちにはないということである。

秀忠はそれほど呑めはしない酒を一気にあおった。同腹で年の近い弟である忠吉は心配そうな顔で兄を見つめる。

「兄上、忠吉・・・実は考えていることがあるのです・・・私はどうしても三成殿と戦いたくない・・・」

「どうすると言うのだ？逃げ出すとでも？」

秀康は不思議そうな顔をしている。弟が凡庸に見えて実は抜け目のない策士としての才能を有していることは知っている。だからこそ、一体何を考えているのかわからないことも多い。その策士である弟を完璧に押さえ込んで使いこなそうとする父に嫌悪しつつも、恐れともいた。秀忠がどう考えようと、家康にはかなわない。

「戦場にいなければ戦うことなどできますまい」

「本当に逃げ出すというのか・・・？」

「逃げ出せば、私に従う諸将にも害が及びましょう。手柄を立てられないならまだしも、大将が逃げ出したとなれば、康政などは腹を切るに違いありません」

「そうだ。そんなことは許されるものではないぞ」

まさかとは思いつつも、秀康の語気が強くなる。そんな馬鹿な事はさせるわけにはいかない。

「逃亡となれば卑怯の局地。急戦も同様。しかし、卑怯よりも無能の方がまだしも罪は軽い。私の無能により遅参したとなれば、配下の諸将にもそれほど大きな害は及びますまい・・・」

「・・・秀忠・・・」

秀康も忠吉も秀忠の異常の決意を感じ取った。何をやるかもおおよそ予想が付いたのである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7833/>

---

仮面の策士 徳川秀忠

2010年10月10日19時56分発行